土木広報センター報告

令和5年度 土木の日および くらしと土木の週間 報告

11月18日の「土木の日」から続く土木学会の創立記念日である11月24日までの1週間を「『土木の日』および『くらしと土木の週間』」として、土木学会本部・全国8支部では、一般の皆さまを対象とした各種イベント、活動を展開しております。

令和5年度は、全国規模で企画・実施され、盛会のうちに終了しましたことをここにご報告いたします。

1987年11月18日に「土木の日」を制定してから、36年を迎えました。各支部や各関係団体の多大なご協力を賜り、「土木の日」が全国的に浸透してまいりました。土木広報センターとしましても、一般の方々に社会資本の重要性を認識していただけるよう継続していく所存です。今後とも多くの方々のご理解やご協力を賜りますようよろしくお願いします。また、ご尽力いただきました多くの皆さま方に心からお礼申し上げます。

本部

土木学会本部では、関係団体のご協力を賜り、「土木の日」および「くらしと土木の週間」期間を中心に、各メディアへの情報発信、「土木の日ロゴマーク」の活用、土木の日関連行事の開催など、各種取り組みを実施した。

メディアへの情報発信として、スポーツ紙への「土木の日」広告掲載（イラスト：漫画家 羽賀翔一氏）、建設紙への「土木の日」会長挨拶（あいさつ）文の掲載、SNSを用いた発信などを行った。

また、「土木の日ロゴマーク」を用いたフライヤー、パネルの制作、土木の日グッズ（ステッカー、風船など）を積極的に配布した。

土木の日関連行事としては、今年度も「土木コレクション」を開催した。土木コレクションでは、土木界が保有する歴史的資料や図面、写真など、普段目にすることができない各種コレクションを展示、公開している。昨年度に続き、新宿駅西口広場イベントコーナーで、11月21日（火）から24日（金）の4日間に約4万8000人が来場した。初日の11月21日（火）には、4年ぶりにオープニングセレモニーを実施し、関係者や報道機関含め、約250名が参加した。

今回の土木コレクションでは、「関東大震災から100年 今につながる帝都復興」「リニア中央新幹線」「森村橋復原」を主たるコンテンツとして展示、公開した。

コンテンツの一つ目「関東大震災から100年 今につながる帝都復興」は、東京・神奈川を中心に未曾有の災厄をもたらした関東大震災から100年の節目を迎えたタイミングで、復興から今なお私たちの生活を支える土木構造物に焦点を当てた展示とした。この展示では、「土木コレクション」の取り組みで収集した資料と、土木学会の機関紙「土木学会誌」の連載「見どころ土木遺産」を基に、帝都復興事業の歴史から東京がどのように成長してきたのかを感じられるよう図面や写真を用いて詳しく解説した。

オープニングセレモニーの様子（「土木の日パネル」と共に撮影）

各コンテンツを鑑賞する人たち

二つ目「リニア中央新幹線」は、日本の新たな輸送の大動脈として注目され、現在も工事が進められており、完成すれば3大都市圏（首都・中京・近畿）を一体化する「スーパー・メガリージョン」の形成につながる一大プロジェクトである。ここでは、超電導リニアの原理、難度が高い南アルプストンネルや都市部のシールドトンネル、高架橋などの工事に奮闘する様子を写真や映像に加え、模型や3Dプロジェクションマッピングも用いて解説した。また、今回限りとして製作したリニア中央新幹線正面の写真を全面に用いた特大ファサードの前では多くの来場者が記念撮影を行っており、大人から子どもまで新たなインフラへの親しみや期待が増している様子であった。

三つ目の「森村橋復原」は、建設から100年以上が経過し、落橋寸前まで老朽化の進んだ有形文化財の復原プロジェクトの全容を映像にて紹介した。映像では、設計当時の図書がほとんど残っていないため、3次元測量による図面化や再現計算の実施、元の部材をできるだけ再利用するための修復・施工の様子を時系列で解説とともに、復原を成功させた技術者たちの苦労も語られている。

また、本年度の土木コレクションもこれまでと同様、東京都建設局との共催で「東京 橋と土木展（東京都建設局主催）」と同時開催した。「東京 橋と土木展」においても関東大震災から100年にちなんだ復興橋梁（清州橋）の模型の展示や橋カードの配布、ペーパークラフトの実施など、さまざまな展示を行った。

会場デザインは新宿での土木コレクションのテーマカラーである黄色で統一し、遠方からでも目に留まりやすい「土木」らしいファサードやフライヤーのデザインに惹かれて、通りすがりに来場したという声も多くあった。会場内では、アンケート回答者へのグッズ配布の仕掛けとして、土木遺産の写真を用いたカードを排出するカードマシンと、本体内側から光を点滅して目に留まるように改良したカプセルトイが注目を集めた。さらにリニア中央新幹線の地下部走行シーンを再現するよう工作した模型の中を走る電池式鉄道玩具の仕掛けも注目を集め、多くの来場者が見入っていた。

今後も土木コレクションへの来場者の皆さまとの交流の経験を生かし、より多くの人に土木の魅力を伝え、土木への理解を深めていただけるよう、さまざまな企画を展開していきたい。

「リニア中央新幹線」特大ファサード

黄色で統一した会場デザイン

大人から子どもまで楽しむ様子

カプセルトイを回す田中会長

北海道支部

北海道支部では札幌、北見、苫小牧、室蘭、函館において、関係機関の協力の下に「土木の日」関連行事を実施した。

各地区では、大学、高専の協力の下、さまざまな行事が開催された。

一例として、北見工業大学で、「おもしろ科学実験」、苫小牧高専のオープンキャンパス内で「洪水ハザードマップを作ってみよう」、室蘭工大祭2023「オープンラボ.in室蘭」、函館高専祭では「社会基盤工学科スタンプラリー」など、工夫を凝らした行事を行っている。

8月1日には3年ぶりとなる「親子で行く土木の現場めぐりバスツアー」を開催し、普段見ることのできない現場を参加者に体感していただいた。

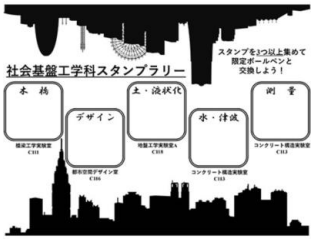
記念講演会「モリナガ・ヨウが描く土木の世界」

親子で行く！土木の現場めぐりバスツアー

さらに11月16～17日には「イブニングシアター」、11月17日に「モリナガ・ヨウの土木展 in 札幌チ・カ・ホ」を札幌駅前通地下歩行空間にて開催。

また、「モリナガ・ヨウの土木展」に併せて、11月20日には「モリナガ・ヨウが描く土木の世界」と題した「土木の日」記念講演会が札幌市内のホテルで開催された。

記念講演会では、学生や一般の方たちも参加され2021年1月から2022年12月まで土木学会誌の表紙を担当されたイラストレーターのモリナガ・ヨウさんと法政大学デザイン工学部教授溝渕利明さんにより座談会形式で、原画にまつわる現場見学時の興味深い裏話などをお話しいただき、楽しいひと時を過ごした。



函館高専祭「社会基盤工学科スタンプラリー」

東北支部

東北支部では、「土木の日特別行事」の一環として2004年度より、大地震災害や津波災害、さらには気候温暖化による河川海岸などへの影響をテーマとして「防災に関するシンポジウム」を開催している。本年度は、「東日本大震災から13年―いままでの産官学の連携を振り返り、明日の土木分野を語る―」をテーマに、東日本大震災からの復旧復興に携わった各分野の方々をお招きし、2部構成にてパネルディスカッション形式で行った。なお参加者数は、会場80名・オンライン約200名であった。

第1部は「連携の振り返り」をテーマとし、コーディネーターは熊谷順子氏（一社）東北地域づくり協会）、パネリストとして、橋本潔氏（宮城県元土木部長）、笹川稔郎氏（東北電力（株）元副社長）、今村文彦氏（東北大学災害科学国際研究所前所長）が登壇された。東日本大震災の発災当時に、宮城県と東北電力そして東北大学において、組織のトップとして震災対応に奔走した当時を振り返り、産官学の連携を念頭に次代に伝えたい教訓と期待などについて議論された。

第2部は「明日の土木分野を語る」をテーマとし、コーディネーターは有働恵子氏（東北大学大学院工学研究科土木工学専攻教授）、パネリストとして、佐藤宏氏（宮城県土木部道路課課長）、大内一男氏（東北電力（株）土木建築部副部長）、渡辺由美子氏（東日本高速道路（株）東北支社仙台工事事務所所長）が登壇された。東日本大震災などの多くの激甚災害とそこからの復興の経験から、人口減少や少子高齢化・気候変動対応などの地域・社会課題も踏まえ、長期的な視点に立ち、持続可能な地域社会を維持していくための土木分野の役割などについて議論された。

なお急きょ、第1部冒頭でパネリストの今村文彦氏より、1月1日に発生した令和6年能登半島地震に関する報告が行われた。全体を通じ、限りある時間の中で、土木への関心が高められる機会となった。

防災に関するシンポジウム

関東支部

関東支部では、関係機関の協力のもとに「土木の日」の関連行事を実施した。

現場見学会は、応募多数のため、抽選で選ばれた方と「品川駅構内環状第4号線交差部新設他工事」および「羽田空港アクセス線八潮工区建設工事」現場を見学した。また、土木技術のすばらしさを子どもたちに紹介するための親子見学会では、神奈川県相模原市にある「中央新幹線神奈川県駅（仮称）新設工事」と、東京都中野区にある「環状七号線地下広域調節池（石神井川区間）工事」を見学。現場見学後の質問タイムでは、たくさんの質問が飛び出し、将来が楽しみに感じられた。土木という仕事に親しみと興味を持っていただけるよう、今後も楽しい見学会を企画していく。本年度も会員交流促進の一環として「土木のある風景」写真コンテストを「土木の日」11月18日より募集を開始した。今回は、関東支部60周年の特別賞を設けている。3月の関東支部技術研究発表会で会場展示し、ご来場の方からの投票でそれぞれの賞が決定された。入賞作品は、カレンダーおよびウェブサイトに掲載される。

また、関係団体にご協力いただき「技術研究所見学会」を実施し、近所の小学校の児童に建設業の役割や新技術開発の取り組みなど、土木技術に触れて楽しい時間を共有した。

関東支部には、新潟・山梨・群馬・栃木・茨城の五つの分会があり、各分会において記念講演会（動画放映含む）、土木遺産の見学会など各種イベントを実施し、土木工学のイメージアップと市民生活との関係の周知に活発に取り組んでいる。

現場見学会の様子

親子見学会の様子

「土木のある風景」写真コンテスト カレンダー

中部支部

中部支部では、10月から11月にかけて「市民見学会」と「親子ふれあい見学会」を開催した。これらの見学会の目的は、土木に対する一般市民の関心と親しみを深めてもらい、土木施設の役割と必要性を理解してもらうことである。

「市民見学会」は、愛知県の中部国際空港（ターミナルビル、滑走路）・名古屋港（飛島ふ頭コンテナターミナル）・名古屋高速道路公社（管制室、ネックス・プラザ）と、富山県の高岡環状線・利賀ダム・城端トンネルの各工事現場など、多数の応募者から抽選で選ばれた70名（両見学会合計）にご参加いただいた。また、「親子ふれあい見学会」は、長野県の笠倉壁田橋（建設工事現場）・浅川第三排水機場・浅川ダムなどの普段見ることが困難な場所も盛り込み、16名の親子にご参加いただいた。見学会参加者のアンケートで「普段見ることができない所を見られて、とても興味深かった」など、多くの好評をいただいたことは、土木に関心を寄せてもらえる一助になったと考える。

中部支部では、この他に中部地方の大学・高専の土木系学生に土木事業の魅力を伝えることと、土木技術者を目指す学生支援を目的とした「土木技術者と学生の交流会」や、教職員や教員を目指す学生および理工系学生の団体を対象とした「エクスカーション（体験型見学会）」の開催、さらに生涯学習の場などに講師を派遣する「出前講座」や「選奨土木遺産のパネル展示」などを行い、土木および土木学会の認知度向上と将来の担い手の育成に努めている。

市民見学会 愛知県名古屋港

市民見学会 富山県トンネル工事現場

親子ふれあい見学会 長野県橋梁建設工事現場

関西支部

関西支部では、「土木の日」および「くらしと土木の週間」の活動として、「土木の日」関連行事関西地区連絡会の主催で、さまざまな企画（連絡会行事）を実施した。

「土木の日」ポスター制作では、「土木がつくるわたしの未来 ～まち・道・鉄道・港・空港・エネルギー～」のテーマでポスターを募集し、全国から計310作品（子供部門165作品、一般部門145作品）の応募があった。選考の結果、大村泰史さん（兵庫県）の作品が最優秀賞となり、土木の日関連行事の広報ポスターに活用した（左図）。

「土木の日」コア行事のFCCフォーラムは、「2025大阪・関西万博 ～未来の土木～」と題したイベントを開催した。万博に向けて研究が進められている最新技術や、会場となる大阪ベイエリア地域の地盤とその形成について話題提供いただき、「どぼくマニア的」万博の楽しみ方を考える機会となった。

2023年度「土木の日」ポスター

2010年にスタートした「どぼくカフェ」企画は通算50回を突破し、歴代の代表幹事による「それぞれのドボクの楽しみ方50選 ～どぼくカフェ50回突破記念～」を開催した。当日はこれまで講演いただいた「どぼくマニア」を含め、多くのどぼくファンが集まった。この他、建設技術展2023近畿の会場で実施した「関西の中心で、土木の魅力をさけぶ！」（共催：土木学会会長特別プロジェクト「魅力ある土木の世界発信小委員会」）、大阪の水晶橋で実施した「水都（スイート）大阪 ～橋の魅力・水辺の魅力～」（共催：中之島ブリッジテラス実行委員会）を実施し、いずれも盛況のうちに終了した。

どぼくカフェ50回突破記念回の様子

中国支部

中国支部では、一般市民の方々に「土木」への理解を深めるため、「身近な土木を描いてみよう！図画コンクール」を実施した。これは、次世代を担う子どもたちに、生活の中で何気なく見ている身近な構造物を描くことによって土木に親しみを持ってもらうことや、私たちの暮らしが土木技術に支えられていることを感じてもらうことを目的とした行事で、平成20年度から実施して今年で16回目の開催となる。

夏休みの課題として、中国5県の小中学校に依頼をし、107校から1059枚の応募があった。低学年の作品は、建設車や乗り物を力強く描き、家族を描いて温かみのある素直な絵が見られ、高学年の作品は、時間をかけてじっくり描いた作品が見受けられた。中には、ICTやDXなど土木の最新技術を使っている様子の題材や、地域にとっては暮らしに必要な除雪車や、生活に必要な通学路にあるトンネルを描くなど、土木を身近に感じているのが分かった。

令和5年11月11日、広島市まちづくり市民交流プラザでは、入賞作品63点を展示して優秀賞の表彰式を行い、中﨑剛支部長から受賞者一人ひとりに表彰状を手渡した。副賞として、優秀作品を掲載した、2024年のカレンダーを進呈した。その他、岡山、島根、鳥取でも優秀賞の表彰式を行い、土木学会本部のロビーでも展示を行い、多くの方のご来場をいただいた。

表彰式（広島市まちづくり市民交流プラザ）

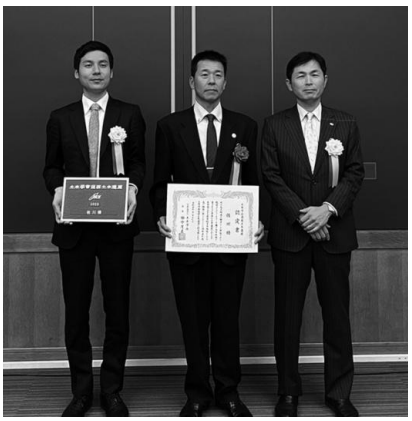
優秀作品を掲載した2024年のカレンダー

展示（松江市民活動センター）

四国支部

四国支部では、関係機関の協力の下「土木の日」関連行事を一般市民や小中高校生を対象に10月から12月にかけて四国各地で実施した。

支部行事として、11月17日・18日に「サンメッセ香川」において開催された「建設フェア四国２０２３ in 高松」に参加し、土木遺産・土木コレクションの展示ブースを開設した。また11月17日に同会場で「土木の日記念行事」を実施した。はじめに、令和５年度選奨土木遺産に選定された「佐川橋」（高知県四万十町）の管理者である四万十町大正地域振興局長を招いて、認定書授賞式を行った。その後、香川大学の長谷川修一氏より演題「四国を救う建設業と観光」で特別講演をしていただいた。


選奨土木遺産認定書授賞式

11月20日から24日まで香川県庁ギャラリーで、土木遺産・土木コレクション展を開催した。11月26日には公募した一般の方22名の参加による、「近代土木遺産バスツアー」を実施し、四国地方整備局が整備した、高知県日高村の新日下川放水路をガイドの案内で管理道から出口まで歩いて見学した。そして土木技術者広井勇の関連施設を見学し、銅像前で記念撮影をした。参加者からは普段接することのない土木構造物に触れることができてよかったとの声をいただいた。

地区行事では、各県において、小中学生、工業系高校、高専生を招いた現場見学会を実施した。また大学高専公開行事として、パネル展示や小中学生を対象として科学実験体験を実施し多くの参加をいただいた。

四国の土木コレクション＆土木遺産パネル展

バスツアー 新日下川放水路見学

西部支部

西部支部では、本年度も各地区でイベントが開催された。

福岡地区では、10月1日に国営海の中道海浜公園で「土木の日ファミリーフェスタ２０２３」が開催され、約３０００人の来場者でにぎわった。

熊本地区では、11月5日に「熊本の土木工事現場見学バスツアー」が開催され、青空の下、次世代を担う小学生から高校生までの子どもたちと保護者（22家族54名）の方々が、滝室坂トンネル、熊本地震震災ミュージアムＫＩＯＫＵ、大切畑ダム、益城町震災復興関連事業を見学した。

右：土木の日ファミリーフェスタ2023（福岡地区）、左：土木フェスタ in ぴらも～る 2023（鹿児島地区）

長崎地区では、「ＤＯＶＯＣフェア２０２３」として、11月12日に長崎市他でパネル・模型展および現場見学会が、11月18日に長崎大学で「土木おもしろ体験隊」が、それぞれ開催された。

宮崎地区では、11月25～26日にイオンモール宮崎で「宮崎県「土木の日」パネル展」が開催された。

鹿児島地区では、11月18日に天文館ぴらも～る等で「土木フェスタ in ぴらも～る ２０２３」が開催された。パネル展示、高所作業車体験、消波ブロック製作体験などが行われ、家族連れなど延べ約３０００人が体験・見学された。

沖縄地区では、11月15日にパレット市民劇場（那覇市）で、沖縄の土木技術を世界に発信する会第28回シンポジウム「新たな沖縄振興計画 新・沖縄21世紀ビジョンがスタート～沖縄らしい風土環境を支えるインフラ整備を考える～」が開催され、１４８名の方々が参加された。

沖縄の土木技術を世界に発信する会シンポジウム（沖縄地区）